

=====**第4回子育てサイエンス・カフェ報告（10月16日実施）**=====

「子育ての楽しさの種をまくー大学生の子ども会活動に注目してー」をテーマに、家政学部児童学科安藤朗子が担当しました。

日本では、2001年度に厚生省（当時）による国民運動計画「健やか親子21（第1次）」に、「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」が取り組むべき課題としてあげられましたが、育児不安の問題は今なお解決されていません。「育児不安」の発生関連要因の一つとして、大人になるまでに子どもとの触れ合いの機会が失われていることがあげられ、それらの機会をもつことの必要性が指摘されています。また、少子化対策の一つとしても、若者たちが生命を次世代に伝え育てていくことや家庭を築くことの大切さを理解するよう、中学生や高校生等が乳幼児との触れ合いの機会をもつ取り組みが推進されています。しかし、大学生の子どもとの触れ合いの機会についての研究等は見当たりません。そこで、今回のカフェでは、大学生がサークル活動として自発的に取り組んでいる子ども会活動の意義を参加者のみなさんと考えてみたいと企画しました。

まず安藤から、育児不安研究とその発生関連要因についての研究や中学生や高校生の乳幼児との触れ合い体験に関する研究についての報告をしました。



発表者の安藤朗子先生

乳幼児との触れ合い体験学習の課題

- ・体験学習の実態形態は多様であり、内容、参加者、スタッフ構成、一回の体験の時間、直接性の有無など、目的によって適切なプログラムや計画が必要とされる。
- ・体験の場（受け手）の問題：保育所・幼稚園では、子どもたちが興味したり、園生活時間の乱れが起こる等。保健センターや児童館のスタッフに、中学生への対応が不慣れな場合があるなど。
- ・学校教育の場（送り手）の問題：授業時間の調整や学校と受け入れ先の連絡調整の問題。
- ・子どもに関心もてない生徒や子どもが泣きまみりで退いた等、体験後もネガティブな感情をもったままの生徒への配慮と対応の必要性。
- ・地域ぐるみの活動とし、地域の養育力向上への期待。そのための事業評価の必要性。

Zoomを利用した遠隔での発表でした。

その後、日本女子大学のサークル活動の一つであり、約60年間の活動の歴史をもつ、駒場子ども会の2020年度会長の東京大学工学部化学生命工学科3年の相馬哲兵さん、日本女子大学家政学部児童学科3年の佐藤みのりさんと鈴木美命さんの3人に、子ども会の歴史や具体的な活動内容、子ども会の魅力、子ども会を通して学んだこと、子ども会活動と結婚観や子育て観との関連などについて、個人的な意見や感想とともに会員への調査結果の報告をしてもらいました。

大学生たちは、子どもと遊ぶことを通してさまざまな肯定的な情緒体験をし、学童期や思春期の子どもたちの発達や多様な個性、子どもとの関わり方などについて理解を深めるとともに、一方では、子どもとの関わりが子育ての大変さを認識するよい機会にもなっていることがわかりました。また、大学生は、子どもと遊ぶときは、友だち感覚でつきあいながらも、子どもの安全面への配慮を怠らず責任感をもって活動しており、子どもを育てる主体としての自覚（養育性）や、地域社会で子育てすることが重要であるといった意識をもつ機会にもなっていることがわかりました。

子ども会の大学生からは、結婚観や子育て観について、「子ども会に参加することによって、育児放棄や妻に子育てを任せきりにすることが少なくなる」、「子育てを楽しいものとして前向きに楽しんでくれる人と結婚したい」など子育てについてのポジティブな意見が出されました。

以上のことから、子ども会活動は、大学生の心の中に“子育ての楽しさの種をまく”よい機会になっていることがよくわかりました。

参加者とのディスカッションの時間をとれなかったことが残念でしたが、参加者アンケートから、「子ども会活動の意義を改めて認識した」、「学生たちの実際の声を聞くことができよかった」等の感想をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。（文責：児童学科 安藤朗子）

12/17 子育てサイエンス・カフェの
報告は次ページをご覧ください！

=====**第5回子育てサイエンス・カフェ報告（12月17日実施）**=====

今回のカフェでは、「心理実験から紐解く親子～親の感受性・応答性を検証する～」と題して、これまで共同研究者と一緒にいった親子実験を解説しました。

最初に紹介したのは、「なぜ集合写真の中の我が子はすぐ見つけられるのか」という素朴な疑問にもとづいた実験です（河地他，2021）。この実験では、複数の顔写真の中にターゲットの顔があるかどうかを判断する「視覚探索課題」を用いました。その結果、自分の子はよその子に比べて素早く探し出せるものの、自分自身や配偶者についても同じように早く探し出せました。どうやら「我が子の顔」だからといって、特別素早く親の目に飛び込んでくるというわけではないようです。



発表者の麦谷綾子先生



Zoom を利用した遠隔での発表でした。

次に紹介したのは、「お母さんは赤ちゃんの泣き声に対して近づこうとするのか？それとも避けようとするのか？」を検討した実験です（Hiraoka et al., 2019; 2020）。この実験ではお母さんにバランスボードにのってもらい、赤ちゃんの声を聞いた時の無意識の重心移動を測定しました。その結果、緊急性が高いと感じる泣き声にお母さんが接近すること、この接近行動は赤ちゃんをなんとか静かにさせたいと焦るお母さんの気持ちと関係している可能性が示されました。また、オキシトシンというホルモンがこの接近行動を制御することも明らかになりました。

最後に、赤ちゃんとお母さんの「あやし行動」に着目した実験を紹介しました（吉村他，2021）。この実験では、お母さんに赤ちゃんを抱っこしてもらい、声や歌、音楽に合わせて体をゆずってあやしてもらい、母子の心拍の変化を計測しました。その結果、音楽を伴うあやしがこどもを落ち着かせること、特に耳から聞こえる音楽と周期的な身体の揺れの合わせ技は鎮静効果が高いことを明らかにしました。

このようにさまざまな実験手法を組み合わせることで、親子の関係性を多角的に捉え、その背景にある心のメカニズムを探ることができます。子育てサイエンス・ラボでは、研究に協力して下さる親子を大募集しています！ぜひお気軽にご参加ください。

会員登録ページは[こちら](#)

（文責：心理学科 麦谷綾子）



会員登録ページ

=====**イベントのご案内**=====

【第3回 JWU 幼児教育・保育セミナーのご案内】（日本女子大学学術交流研究費運用事業）

日時：2022.1.22（土）14：00～16：00（受付13：30開始）

会場：日本女子大学 新泉山館1階 大会議室

テーマ：「子どもがケアする世界」をケアする ～ドキュメンテーションを手がかりに～

講師：玉川大学教育学部幼児発達学科教授 岩田恵子 先生

参加費：無料

主催：日本女子大学家政学部児童学科

共催：日本女子大学附属豊明幼稚園、日本女子大学大学院家政学研究科児童学専攻

申し込み方法等の詳細は以下 URL または QR コードをご確認ください。

https://www.jwu.ac.jp/unv/lecture_news/2021/20220107_01.html

写真による記録などのドキュメンテーションを作ることが近年の保育現場では多くなっています。実践例を振り返りながら、ドキュメンテーションの役割と可能性、子どもとのかかわりあいの変容などについて考え、保育の実践について理解を深めたいと考えています。ご興味や関心のある方は、どなたでもご参加できます。お待ちしております！

